

【一】江戸時代の風習が色濃く残った路地での生活

一、ロバート・ブルームの絵

明治期に日本を訪れた画家、ロバート・ブルームというアメリカ人がいた。彼は当時の日本の庶民の姿や生活の様子を実に生き生きと描き出している。

最も印象に残っている絵は、飴売りの屋台が路上で子どもたちに飴を売っているところを描いたこの絵（「THE AMEYA」 出典ウィキペディア）だ。

飴を細工しているのだろうか、子どもたちは目を輝かせて、飴屋の手元を見つめている。子どもたちは、今で言う小学生くらいだろうか、皆一様に赤ん坊をおんぶしている。

屋台の後ろには、牛めし屋や肉屋のような商店がぎっしり並んでいる。

今から百五十年くらい前、私が小学生だった頃から勘定すれば、たった七十年前の日本の風景である。

舗装していない道、屋台、子ども相手の商売、赤子をおんぶした子どもたち。大きな違いと言えば、描かれた子どもたちは着物を着て下駄を履いているところくらいだろうか。